

2011年7月30日 軍縮学会研究大会  
部会1 軍縮研究のフロンティア

## 「安定-不安定のパラドックス」の妥当性と核兵器の役割低減

一橋大学大学院法学研究科 博士課程  
栗田 真広

### はじめに① ~背景と問題意識~

- 国際社会における核兵器の拡散の懸念  
核保有国の行動を説明・予測する必要の増大
- 「参照点」とされる核戦略・核抑止理論の性質  
理論が発展してきた「冷戦期」の特異性  
二極構造、拡大抑止、核抑止の中心的役割、イデオロギー対立etc...  
核の存在が国家間の軍事対立の全体を規定すると捉える傾向

↓

従来の核戦略・核抑止理論は、冷戦後の新たな核保有国の問題において妥当性を有するののか？  
仮に核兵器の持つ影響が過大に評価されているならば、正しい認識としてより低減された核の役割を明らかにすることこそ、戦略論からの軍縮・不拡散への貢献となり得るのではないのか？

### はじめに② ~背景と問題意識~

- インド・パキスタン関係  
1998年の核実験以降、米ソ以外の新たな核保有国間の軍事対立におけるリーディング・ケースとされ、冷戦期の核戦略・核抑止論が盛んに援用される。中でも、安定-不安定のパラドックスが妥当する典型的な事例との説明が定着。
- 安定-不安定のパラドックス (stability-instability paradox)  
スナイダー(Glenn H. Snyder)が1965年に提唱、核レベルの抑止の安定と通常戦争以下のレベルの安定の関係について論じたもの。前者が安定すると逆に後者が不安定化して、全面核戦争未済の軍事行動が可能になるとする。

↓

Q. 理論的に見て、核抑止の存在は安定-不安定のパラドックスの形で低強度紛争を可能にすると言えるのか？  
Q. 印パ関係において安定-不安定のパラドックスは妥当するののか？

### 冷戦期の安定-不安定のパラドックス①

- 冷戦初期の欧州正面における前提
  - 現状打破勢力としてのソ連
  - 通常戦力面での東側の優位
  - 核戦力面での西側(米国)の優位
- 西側は核報復の威嚇による東側の通常戦争抑止の構え  
⇒大量報復(Massive Retaliation) 戦略へ
- 大量報復戦略の動揺(1950年代半ば)
  - ソ連核戦力の拡充と米本土の脆弱性 e.g. スプートニク・ショック
  - 拡大抑止につきまとう信頼性(credibility)の問題

東側による西側への侵攻に対し、米国は自国がソ連戦略核の攻撃を被る危険を冒してまで、対ソ核攻撃に訴えるのか、という疑問  
⇒「米国は核攻撃に踏み切れない」とソ連が捉えれば、東側は核抑止を「盾」として、西側への通常戦争に出る可能性がある

「戦略的な」恐怖の均衡が安定的になればなるほど、暴力のより低いレベルにおいて、全体的な均衡の安定性が損なわれる。すなわち、両者ともに「完全な第一撃能力」を持たず、また互いにそれを知っているときには、戦略的な均衡が不安定である場合よりも、両者は通常戦争や限定的核使用といった行動に出ることを躊躇しにくくなる。

Glenn H. Snyder, "The Balance of Power and the Balance of Terror" (1965)

全面核戦争のレベルにおいて軍事バランスが安定するほど、暴力の低いレベルはより不安定になる。すなわち、もしコントロール不可能な戦争が相互の破壊に至るなら、どちらもそれを開始しようとはしない。だがこの安定ゆえに、(挑発には)全面報復で応じるとの威嚇が信頼性を持ち得なくなり、結果どちらかの国家による限定的な暴力の行使が可能となる。

Robert Jervis, *Illogic of American Nuclear Strategy* (1984)

### 冷戦期の安定-不安定のパラドックス②

- ソ連通常戦力の脅威に対する拡大抑止の信頼性追求(1960s~)
- 対兵力打撃(counterforce)能力向上による核戦争遂行能力の確保  
e.g. 限定核オプション、損害限定(damage limitation) etc...
- 「望むと望まざるに拘わらず」米国を巻き込んだ核戦争を発生させる仕掛け線(tripwire)  
e.g. 戦術核・米通常戦力の前線配備  
⇒柔軟反応戦略(Flexible Response) 戦略への転換
- それでも消えないパラドックスへの懸念
  - 核戦力の拡充は核軍拡競争へと帰結、相互確認破壊(MAD)の成立<but>MADが強固になるほど、ソ連通常戦力に対する核抑止に伴う信頼性は浸食されてしまう
  - 結局は相手の認識に依存、測れない信頼性のレベル

安定-不安定のパラドックスへの対処が、拡大抑止議論の中核

### 印パ関係の概要

- ・ インド・パキスタン関係
    - ・ カシミール地方の領有権問題をめぐる対立
    - ・ 過去三度の戦争
    - ・ 通常戦力の不均衡とパキスタンの低強度紛争
  - ・ 核兵器開発の経緯
    - ・ インド：中国の脅威を意識して核開発を開始、1974年に「平和的核爆発」と称した実験を実施
    - ・ パキスタン：第三次印パ戦争（1971）とインドの核開発を受け、核開発を開始、1980年代末には核保有に至る
- ⇒ 1998年5月に両国は相次いで核実験

### 印パ間の安定－不安定のパラドックス①

- ・ 1990年前後から事実上の核保有国とされ、1998年の核実験を経て公然の核保有国間対立となる
- ・ パキスタンによる対インド低強度紛争
  - ・ インド側カシミール等における反乱・テロリズム支援
  - ・ 実効支配ライン付近での局地的な軍事侵攻
  - cf. カルギル戦争（1999）、インド国会テロ事件（2001）
- ・ 安定－不安定のパラドックスの台頭
 

「核レベルの抑止の安定が全面核戦争より低いレベルの紛争を可能にする」という命題を援用して、パキスタンの低強度紛争を説明する議論が支持を集める

特にカルギル戦争以後、印パ関係は安定－不安定のパラドックスの典型例とみなされるようになるが、一方でそれが実際にどのようなメカニズムで低強度紛争の発生に繋がっているのかが不明確な部分も

1999年のカルギルにおけるインド・パキスタンの国境紛争は、安定－不安定のパラドックスの予測するところと一致する。これは、核兵器が核エスカレーションの恐怖によってあるレベルでの安定性に資することが前提である。だが同時にそれは、両当事者が特定の共有された数値（threshold）を越えない限りにおいて、周辺の地域での限定戦争に従事するインセンティブを生む。

Sumit Ganguly, *Conflict Unending: India-Pakistan Tension since 1947* (2002)

専門家は、この現象を安定－不安定のパラドックスにより説明している。すなわち、核抑止の盾の存在が、特に現状変更を企図する者にとって、低いレベルの軍事行動によって現状維持に挑戦することが安全であると考える上での根拠となっている。

David J. Karl, "Lessons for Proliferation Scholarship in South Asia: The Buddha Smiles Again" (2001)

### 印パ間の安定－不安定のパラドックス②

- ・ カプール（S. Paul Kapur）による批判
  - ・ 先行研究の多くはパラドックスがいかに機能するかについて曖昧
  - ・ 冷戦期と印パにおけるパラドックスの構図の差異
- ⇒ 通常戦力優位と現状維持/打破の志向性
 

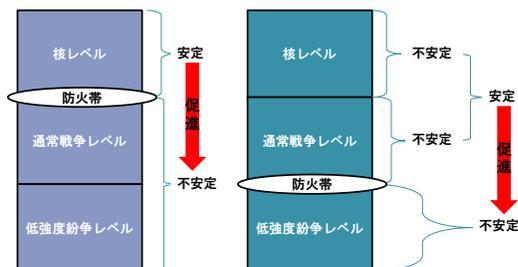
通常戦力優位を持つ連が現状打破勢力であった冷戦と、通常戦力劣位を抱えるパキスタンが現状打破勢力である印パ関係  
冷戦期の安定－不安定のパラドックスをそのまま当てはめれば、通常戦争による現状変更が可能なのはインドのはず



印パ間では、核レベルの抑止の安定ではなく、むしろその不安定（＝パキスタンが通常戦争の過程で核攻撃に踏み切る可能性の高さ）こそが、同国がインドの通常戦力による報復を恐れずに低強度紛争を遂行することを可能にしている

⇒ 不安定－不安定のパラドックス（instability-instability paradox）

- ・ 米ソ関係のパラドックス（安定－不安定のパラドックス）
- ・ 印パ関係のパラドックス（不安定－不安定のパラドックス）



### 印パ間の安定－不安定のパラドックス③

- ・ その後の議論の展開
 

カプールの「不安定－不安定のパラドックス」のメカニズムが、「安定－不安定のパラドックス」として定着  
e.g. Ganguly (2008), Mistry (2009), Khan (2009), etc...
- ・ 低強度紛争を可能にする核の役割自体への反論
  - ・ Lavoy, ed. (2009)は、安定－不安定のパラドックスの代表例とされるカルギル戦争を取り上げ、これは核抑止が可能にしたものではなく、核保有以前からの低強度紛争の継続に過ぎないと主張

修正・反論を受けつつも、安定－不安定のパラドックスは印パ間の低強度紛争を説明する有力な説として支持を集める

### 理論的検討①

- 二つのパラドックスの関係性
 

通常戦力で優位にある側が核レベルでの安定を頼って通常戦争以下のレベルで軍事行動に出るパラドックスと、通常戦力で劣位にある側が核レベル・通常戦争レベルのトータルでの安定を頼みに低強度紛争レベルでの軍事行動に出るパラドックス

⇒両者は相反する関係、両立し得ない二つのパラドックス

e.g. 前者が機能しているなら、パキスタンはインドの通常戦争報復を恐れて低強度紛争に従事することは困難

後者が機能しているなら、インドはパキスタンの核使用を恐れて通常戦争に訴えることは困難



それぞれのアクターは、自身に有利な形でパラドックスが機能しているとの確信を得られるのか？

### 理論的検討②

- 核抑止の「信頼性」ふたたび
 

先行研究における前提：拡大抑止と相互抑止の間での信頼性の差

  - 冷戦期における西側の対ソ通常戦争抑止は拡大抑止
  - 印パ間における抑止は相互抑止

⇒自国の存亡という死活的利益が脅かされている場合、たとえそれが相互に破滅的結果を招くものとしても、核攻撃に踏み切ることが信頼性を帯びる

⇒利益の格差（balance of interest）に則った信頼性の回復

相互抑止であるからこそ、通常戦力面で劣位のパキスタンに有利な形でパラドックスが機能する（とパキスタンは確信できる）というのが先行研究の前提

### 理論的検討③

- 相互抑止における抑止の信頼性はそこまで自明か？
  - 「一番やりたくないことをやる」核威嚇の性質
 

⇒「完全な第一撃能力」が存在しない限りは、核戦争はどちらのアクターにとっても極めて被害が大きい
  - 相手の認識への依存と測れない信頼性
 

⇒重要なのは自国が核使用に踏み切る覚悟のあるなしではなく、相手がそう考えるか否か、そしてそれは「分からない」
- 印パ間では？
  - パキスタンにとって、対インド「完全な第一撃能力」確保は不可
  - 複数のインド高官・戦略家による、「逆」のパラドックスが存在しているとの認識を示唆する発言
 

e.g. 国防相フェルナンデス（George Fernandes）  
陸軍参謀長パドマナバン（S. Padmanabhan）  
国家安全保障諮問委員カルナド（Bharat Karnad）

理論的にも、そしてパキスタンにとっても、パラドックスがどちらの形で機能するのかを確信するのは困難

### 印パ間の低強度紛争

- 印パ間における地域安全保障上のコンテキスト
  - 独立時から続く「弱者の武器」としての低強度紛争
 

「もっともらしい否認（plausible deniability）」、規模と目的の限定
  - インドにとって大規模通常戦争を困難にするファクター
 

パキスタンの大規模な通常戦力、両国間の社会的・文化的紐帯、第三国の介入
- 安定—不安定のパラドックスとの矛盾
  - カルギル戦争でのパキスタンの抑制的行動
  - ムシャラフのカルギル戦争に関する発言



パキスタンの低強度紛争は、印パの地域安全保障上のコンテキストがその遂行を可能にしてきたものであり、核抑止の役割は、それを補強することはあったとしても、主な構造要因であったと見るのは不可能

### まとめ①

- 核兵器が国家間の軍事対立に与える影響の過大評価
 

安定—不安定のパラドックスのみで、核保有国間での低強度紛争を説明することは出来ない

⇒国家間の軍事対立のあり方を規定する核兵器の影響はより限定的、地域安全保障上のコンテキストが依然重要であり続ける
- 他のケースへのインプリケーション
 

北朝鮮、イランをどう考えるか？

⇒両国とも、通常戦争へのエスカレーションを引き起こすことなく、通常戦力で優る敵対国に対して低強度紛争を行ってきた長い歴史

北朝鮮：大韓航空機爆破、ゲリラ部隊による青瓦台襲撃etc...

イラン：PJやハマス、ヒズボラ等の武装組織への支援

⇒核保有後も同様の軍事的現状変更行動は継続する

### まとめ②

- 「核バイアス」回避の重要性
  - 「安定—不安定のパラドックスではない」ことが意味するもの
 

⇒核抑止の存在が低強度紛争を可能にしているなら、インド側にとっての解はパキスタンの核抑止の信頼性の浸食、すなわち「完全な第一撃能力」の追求

e.g. 対兵力打撃能力の向上、核戦力の即応性向上、事前授權の推進

<but>核抑止が紛争を可能にしているわけではないから、パキスタンによる低強度紛争は止まらない

⇒パキスタンは対抗して核戦力拡充、軍拡競争のモメンタムが発生

⇒「意図せざる核使用（inadvertent use）」のリスク増大
  - 水平的核拡散へのアンチテーゼ
 

⇒「核抑止の獲得により、通常戦力で優る敵対国に対し低強度紛争の遂行が可能になる」との誤った認識の普及による核拡散の阻止

既存の理論での核兵器の影響に関する議論を再検討し、実際はそれが国家安全保障上果たす役割がより限定的なものである点を明らかにすることが、核戦略・核抑止論の単純・不拡散への貢献となる

## 主要参考文献

- Ganguly, Sumit and Devin T. Hagerty, *Fearful Symmetry: India-Pakistan Crises in the Shadow of Nuclear Weapons*, New Delhi: Oxford University Press, 2005.
- Ganguly, Sumit and S. Paul Kapur, eds., *Nuclear Proliferation in South Asia: Crisis Behavior and the Bomb*, London: Routledge, 2009.
- Jervis, Robert, *The Illlogic of American Nuclear Strategy*, Ithaca, NY: Cornell University Press, 1984.
- Kapur, S. Paul, *Dangerous Deterrent: Nuclear Weapons Proliferation and Conflict in South Asia*, Stanford, CA: Stanford University Press, 2007.
- Lavoy, Peter R., ed., *Asymmetric Warfare in South Asia*, Cambridge: Cambridge University Press, 2009.
- Snyder, Glenn H., "The Balance of Power and The Balance of Terror," in Paul Seabury, ed., *The Balance of Power*, San Francisco, CA: Chandler, 1965, pp.184-201.
- Sridharan, E., ed., *The India-Pakistan Nuclear Relationship: Theories of Deterrence and International Relations*, New Delhi: Routledge, 2007.